

ラボの世界

THE WORLD OF LABO

TOPIC

墨絵の国から
世界を見る

最終回 P4

- 01 10代とともに「異文化と出会うこと」
- 04 本多豊國氏「墨絵の国から世界を見る」
- 05 世界へ！ -カナダのラボ高校留学カウンセラー④-
- 06 世界の国から -アゼルバイジャン共和国の巻-
- 08 Hello ラボ・インターンベンバルプログラムでも使えるような表現の紹介
- 09 Go Ahead! -世界で通用するコミュニケーションカ-



広い世界に ひとつの思い



10代とともに

石井恵理子

Ishii-Eriko

日本語学校、筑波大学留学生教育センター等を経て、1988年より2004年まで国立国語研究所に勤務。その間、文部科学省の海外子女教育専門官、政策研究大学院大学客員教授を併任。2004年より東京女子大学に勤務、現在にいたる。公益財団法人ラポ国際交流センター理事。ことばの教育・学習が個々人のあり方、社会のあり方にどのように関わっているか、日本語教育の社会的役割を課題として追究している。2016年3月より文化審議会委員、2017年5月より公益社団法人日本語教育学会会長。著書に『「移動する子どもたち」のことばの教育を創造する』（ココ出版、共著）、ほか。



日本語教育が専門の石井恵理子さんは、外国から日本に来た人たちがいることがふつうになったいま、いかに互いに違いを知ったり共有することができるかがだいじであり、異文化との出会いこそが新しいものを生む、と語ります。

異文化と出会うことで 新しいものが生まれる

日本語教育というのは幅がひろい

ひとくちに「日本語教育」といっても、さまざまな場面があるんです。たとえば、国内外の大学や日本語学校で、外国人が日本語を学習する場面もあれば、日本に移り住んだ外国人の子どもが、通常の授業以外で日本語を学ぶ場面もあります。

また私が所属する日本語教育学会にはおよそ4,000人の会員がいて、ことばのしくみ、ことばと文化、ことばと社会、ことばの学びなど、ことばに関するさまざまな興味・関心をもつ人が集まっています。そしてふつうの学会と違って、学術研究をしている人だけで

はなく、実際に日本語を教えている人もいれば、外国人の人権ということについて取りくんでいる人など、さまざまです。

—どんな子ども時代でしたか？ 外遊びが大好きで、本も好きでした

小学生のうちはひたすら外で遊んでいました。当時は「巨人の星」というマンガが流行っていたこともあり、とにかく野球が盛んですが、女の子で野球をやる子はさすがに少なかったんです。でも私は男の子たちのなかにひとりだけ入れてもらっていました。他校へ交流試合にむかうとき、みんなは自転車に乗って行くんですけども、私の家は「危ないから自転車はダメ」だったんです。でも、自転車がないからあきらめるのではなく、男の子たちが自転車でガーッと走っていくあとから走ってついていく、などということをしていました。学校でも休み時間はずっとドッジボールをしていました。ほんとうに外で遊ぶのが大好きな子どもでした。

中学、高校時代もスポーツづけでした。高校は女子校で、入学したときに剣道部はなかったんですけども、それを何人かで立ちあげて、私たちは3年生のときに県大会で3位をとりました。とにかく部活動に明け暮れる毎日で、あの頃のことでいちばん先に思うかぶのは部室の風景です。

一方で、本や映画にも影響を受けました。いまでも強く印象に残っているのは、小学校

4年生のときに担任の先生が見せてくれた「橋のない川」という映画でした。部落差別について描かれた小説（住井すゑ著）が原作で、何の理由もなくただその部落に生まれたというだけで差別をされている人たちのことを描いた作品です。生まれた場所を理由に、就職や結婚ができないなんてと、とても衝撃を受けました。いまでもそうした差別はなくなっていない。「橋のない川」というのは、川に橋がかかっている自由川を越えて向こうの世界に行けるのに、被差別部落の人たちの前には渡る橋のない川が流れている、という意味だと思います。それ以降、社会にあるさまざまな差別について考えつづける必要はないとずっと思っていました。

中1の頃、母が図書館で借りてきたんだっと思いますが、大野晋（国語学者、文学博士）という学者が書いた『日本語をさかのぼる』（岩波新書）に出会いました。古い時代からいまで、日本語がどのように変化してきたか、また、ことばがそれぞれの地域や社会で、その人たちや生活といかに関わっているかということについても深く研究をされた先生でした。私は「大野先生のところで勉強したい」と思って大学を選んだんです。

—日本語教育の道に進んだきっかけは？ 教えることは学ぶこと

日本語の研究がおもしろくて、私は大学院に入ろうとしたのですが、「大学院なんかに

10代とともに



行ったら嫁のもらい手がなくなる」(そういう意識が強い時代でした)と、親は大反対。それを押しきって大学院へと進んだものから、自分で学費を稼がなければいけません。それでアルバイトを探していたら、たまたま大学のそばに日本語学校ができ、「日本語を教えるという仕事があるんだ」と興味をもち、養成講座を経て大学院と日本語学校を行き来する毎日となりました。

外国人に日本語を教えるということは、「日本語を外からみる」ということなんだな、おもしろそうだな、と思ってこの世界に入ったら、ほんとうにおもしろくて、それっきり出てこれなくなったというわけです。

たとえば、日本語母語話者の自分が「このシチュエーションだったら当然こういう気持ちで話すだろう」と思っていたことが、日本語学習者から、「どうしてこういうのか」「自分たちはこんなことはいわない」と反応されることがあって、「文化が違うとシチュエーションのとらえ方が違うんだ」と気がつきます。「日本語ではこういうんです」といい張るだけでは、なににも生まれません。教える立場であっても、彼らの文化や社会、ことばなど、いろいろと教えてもらえます。それぞれがあたりまえに思っていることが、文化によって違う。それをお互いに知ることができる。アルバイトのつもりで入った日本語教育の世界でしたが、異文化のことをたくさん教えてもらえて得をした気分でした。

そんなふうに日本語教育に関わりはじめたのは1980年代はじめの頃で、日本がとても景気のいい時代でした。海外からたくさんの人たちが来始めた時期でした。まだ「日本語教師」という職業が知られていなくて、「国語の先生?」「外国人に日本語を教えるんだったら英語ができるんだね」などといわれるような時代でもありました。

—日本語を学ぶ子たちの現状は? 外国から来た子たちのたいへんさ

外国から来る子は、日本語を勉強してから日本に来るということはあまりありません。日本語ができないと、先生も子どもたちも日本語しかできないので、コミュニケーションが満足にとれません。

外国から来たばかりの子は自分のなかにいろいろな力をもっている、それを日本語では表現できないため、まわりから「できない子」と見られてしまう。自分の国のことばでなら伝えられること、できることがあるのに、それをわかってもらえない機会がないんです。そして、日本の学校文化を知りませんから、みんなと違う行動をしたりするため、なかなか仲間に入れてもらえないこともあります。日本の子どもたちが外国の子たちを見て「ああ、そういうやり方もあるんだ」と違いを受け入れてくれればいいのですが、異文化を理解して、受け入れるということはなかなかむずかしいことです。異文化をもった子どもが日本語で文化の違いを説明できるようになるには、時間がかかります。

そして、日本の子どもは「学校ではみんな同じようにしなければならない」という気持ちが強いと感じます。そういうところを少しゆるくして、多様性を認められるようになると、異文化をもった子どもだけでなく、日本の子どもたちも「ほんとうの自分」を自由に、豊かに出せるんじゃないかと思います。

調和もだいじですが、違うということを認めて、マイノリティの子をどう受けとめるか、ということを考えたほうがいいのではと思います。たとえばアメリカに行くと、「ここはアメリカだからアメリカのやり方で!」といわれ続けたり、つらいと思いませんか? そういわれることは、海外から来た異文化をもつ子どもたちにも、同じようにプレッシャー

になります。

—日本語を学ぶ人たちが困ることは何ですか? モチベーションがだいじ

日本語を学ぶうえで、モチベーションがだいじです。私が日本語教育に関わり始めた頃に比べて、日本に来る目的は多様になっています。日本語を学ぶモチベーションもさまざまです。教えることの幅がひろがっていて、むずかしいこともあります。

たとえば工場などで働く場合、日本語ができる人がひとりいれば、作業についてみんなに伝達することで作業は進みますから、「職場では日本語はいらない」という場合もあります。ですがことばがわからないために職場や地域の日本人コミュニティとの接点がない場合、孤立したり、同国人で固まって生活していくことになります。しかし、災害などが起きた場合、日本人コミュニティとつながっているかどうかは命に関わる重要なポイントとなります。

こうした人たちの面倒をみるのは受け入れた企業まかせで、さまざまな問題があったときにきちんと対応されないということが起こっています。たとえば同じような制度で外国人を受け入れている韓国では、国が直接相談を受ける窓口をつくっています。そういう点では日本はまだ改善すべき点がたくさんあると思います。

また、親のついでで日本に来た子どもたちは、ことばが通じない日本でなにがしたいといった目的も見つけれず、同じことばが通じる子たちがいる場合は、学校に通うことは楽しくても、日本語での授業はわからないので、がんばろうという気になれない、ということも少なくありません。ですから授業以外の時間などに、たとえば、アイスクリームを作ろうということで、温度計を差しこんで「あ、マイナス1度だ!」と体験させながら

10代とともに

目盛りを読むようにするなど、くふうすることがだいじです。モチベーションがあって、はじめて学びがあるので、そういう学習サポートが外国から来た子たちにできると思います。「この子たちはどうやってワクワクするだろうか」と考えるのがだいじだと思います。ラボではそういうモチベーションをもつ機会がたくさんあることがすばらしいと思います。

—外国の人をどのように受け入れるべきですか？ 多文化共生で日本も元気になる

「多文化共生」ということばがつかわれるようになってだいぶ経ちましたが、いま日本の社会がそうになっているかという点はまだです。しかし、ボランティアの方などで自分が住む地域社会をどのようにしていったらいいのかということの本気で考えている方たちもたくさんいます。

外国人というと都市部のことが思いうかぶと思いますが、実際には地方や過疎地域にも外国の人たちがいるんです。そしてそういう人たちと関わることで地域が活性化した例もあります。また多文化共生社会をめざさないと地域が成り立たないのも日本の現実です。過疎化した地域にも若い人たちが戻ってこられるようにするためにも、外国の人たちとも共生して活性化させることがだいじだと思います。

—10代の人たちにメッセージを いろんな人と「話しあって」ほしい

やはり「多様性」ということばがキーワードになると思います。いま社会が大きく動いている、もしくは人がすごく動いているといえると思うんです。うまくいくと活性化して新しいものが生まれてくると思います。

ただ「動き」がどっちに向かっていくのか

ということがだいじです。どんな社会だったらいいいのか、ということを考えるべきです。若者同士で話したほうがいいですし、若者が私のような年代の者とも話したほうがいいです。いま、すごいスピードで社会が変化している時代ですので、世代間で価値観を共有する、違いを知るといのはとてもだいじではないかと思います。そのほうが、その後の展開の幅もひろがっていくように思います。

そういう時代にラボのみなさんのように国際交流体験があると、その経験が生かせると思います。外国人のみなさんとふれあうなかで多様性に気づき、その多様性がみなさん自身にも生かされるということになります。ぜひそういう意識で活動していただけたらと思います。

(文責 編集部)

インタビューを終えて

[取材協力]

木下裕子P(神奈川県)／柳下舞美P(神奈川県)

石橋幸子P(神奈川県)

木下裕子パーティ

いままでは「言語」や「文化」という、表面的なものばかりを見ていましたが、ほんとうに違うのは、そこに住む人の考え方そのものなのだと思います。アメリカのホームステイで、朝食でソーセージをフライパンで焼いて食べようとしたとき、「なにをしようかな」といわれ、真っ黒になるまで焼いたので、わけがわかりませんでした。いま考えると、ちゃんと火を通したかったのかな、と思います。今後外国人と接する機会があったら、ちゃんと聞いて、伝えて、コミュニケーションをとろうと思いました。(門馬啓明／高2) ●小学生のとき、海外から来た子はある程度日本語が話せたけど、もし日本語をまったく話せなかったらどうなっていたらうか。海外の人に道を尋ねられたらなんとか答えられても、いざ毎日いっしょに暮らすとなるととてもたいへんだらうと想像する。とくに学校では、友だち

のグループができていなか、さらに言語の壁というものがあるのはだかるといわれた。「あたりまえ」には別のものである、と考えないといけないし、理解する姿勢がたいせつだと思った。(今野涼太／高2) ●日本語を教えるという職業はただ日本語を教えるだけでなく、日本を客観的に見ることで海外の国々とのことばづかいの違いから始まり、人間や教育の文化の違いについてまで気づくことができると思いました。日本語教育に関わらず自分の夢ややりたいことをどう見つけるのかなどを教えていただけて、自分の成長につながる時間にできたと思います。(中野陽南／大1)

柳下舞美パーティ

自分たちにあたりまえのことを「ふつう」と決めつけてしまうと新しいものが生まれません。その通りです。文化が違うと考え方も違うはずで、それを怖がってはいけないうのだと気づきました。

お互いの文化を尊重することで相手を受け入れることができると思うし、「そういう考え方もあるのか」と発見するようなかたちでシェアするといいいかなと思います、興味深かったです。(杉本 楓／中2) ●常識や固定観念、それぞれの国であたりまえだと思っていることがあるということをお話で印象に残りました。私たちは外国と日本だけでなく、世代間や住んでいる地域間での価値観の違いや文化の違いにふれることがあります。まず相手の文化を知り、受け入れることがたいせつだと思いました。(半澤青葉／高1) ●ぼくは、みずからの文化とほかの文化がともに存在しているという姿勢をあらためて学びました。自分もホームステイの経験がありますが、ステイ先のホストの人たちは、そうやって自分を受け入れてくれたのかなと実感しました。(鯨井琢磨／高1)

石橋幸子パーティ

日本語講師というのは、「日本語を外からみられる仕事」「海外の文化とふれられる仕事」で、生徒さんからことばと結びついていられるさまざまな文化を教えられることもあると思いました。また事情により自発的ではなく学

び始める人もいて、そういう人にはまず楽しい、おもしろいと思えるように投げかけるのがだいじだといわれました。多様性を比べたりのではなく、理解し、その多様性を生かせるようにするという姿勢を今後見習ってみたいです。(山田まり／中3) ●今回教わったことで、ことばだけではなく身ぶり手ぶりや表情をつかう方法があるということを知ったので、これからはもっと視野をひろくもち、生かしていければいいなと思いました。(瀧 友起／高1) ●外国と日本の言語の違いやそれに対する接し方などを学ぶことができません。日本語をよく知らない外国人と関わる場合、相手の国のことばを学んで相手が日本語を知らないことを意識して、相手に伝わるような努力をすることがたいせつだと学びました。(青木大征／高1) ●外国人の生徒の方に日本語を教えるというお仕事はかんたんそうに想像していましたが、お話を聞いていると、先生自身も生徒の方から気づかされる、文化や日本語にしかないニュアンス、日本人と外国人での、受けとる「ことば」に対しての感情の違いなどに驚きました。(瀧 一起／大2)

[取材日] 2021年2月

墨絵画家・本多豊國の

墨絵の国から世界をみる



本多豊國（ほんだ・とよくに）

墨絵画家、絵本作家。作風は版画、墨絵、色彩画、それらを融合した「墨彩画」を特徴とする。1987年、イタリア・ボローニャ国際絵本原画展で「こぶとり」が入選。以後、ヨーロッパで絵本原画の賞を数多く受賞。アメリカでは特別展が催されるなど、海外でも評価が高い。

公益財団法人ラボ国際交流センターの評議員でもある墨絵画家の本多豊國氏。最終回となる今回は、「旅」について寄稿いただきました。

旅に出よう！

「墨絵でアメリカを描こう」と思って2001年からアメリカの旅が始まりました。旅は人生にたとえられますが、まさにその通りです。旅では、いろいろなヒトやモノやデキゴトに「出会い」ます。

アーバインでの墨絵ライブの後、近くのホテルに1週間滞在。近くのイタリア人夫婦のホットドッグ・ショップに通った。ソーセージを焼いてパンにはさんでくれ、ピクルスや野菜は自分で好きなだけ入れて食べる。「うまいね」「おれが作ってるからな」。筆ペンで夫婦を描いてプレゼント。ホビ族のおじさんに「教え」られることもありました。また、南カリフォルニアの紫色のジャカランタの花が好きになったり、道を横切っていくコヨーテと目があったり、チリチリと焼ける砂漠やロッキー・モンタナの黒い森との出会いもありました。

また展示会やデモンストレーション、そして大地に座りこんでスケッチをしているときの、たくさんの人々とのおしゃべり。出会いは、心身に深くしみこんで「経験」となります。いいことでも、つらいことでもむだな経験というものはありません。旅の出会い、経験はほとんどの場合、大なり小なりに「感動」ともなっています。旅は出会いであり、経験であり、感動です。こうしてヒトや自然やモノとつながって、この絆がぼくたちみんなの物語をつくりはじめます。



このバーガーショップで働く女子高生がいう。

「たぶんこの町で一生暮らすわ」

笑顔のなかに彼女の一生が見える。

ぼくたちは彼女の一生分の行動範囲をたった2日で走りぬけてきた。

これが生きている意味です。だから「旅」をしなくてはなりません。コンビニエンスストアへジュースを買いに行くのも「旅」です。ここでないどこかを想像すること。それが「旅」です。

世界はいつもやさしく開いています。ぼくのいいことは、たったひとつです。まずは一歩、歩きはじめよう。



ターキーサンドが大好き！ 目に入るとつい手が出る。

そうするとすぐに、ヒトやモノやデキゴトに出会います。それはその場であなたを変え、あなたをつくりはじめます。それに気づいたとき、感動がおしよせてきます。

「旅」の準備はなにもいらないと思います。「よし、出発しよう」「毎日が旅なんだ」と思うだけで、だいたいはいじょうぶです。

ぼくもコンビニへ、駅へ、アメリカへ出発します。どうぞあなたもいい旅を！ Have a good trip!!



カリフォルニア州ラグナのレストラン「フカダ」にはぼくらの作品「龍」がある。そして天ぷらとかいろいろある。ドリンクも！

世界へ!!

ラボ・カウンセラーより ④

ラボ高校留学プログラム カナダ

日本の家族のように、毎日いっしょに過ごすホストファミリー。今回は受入れ側のことも考えつつ、今後留学を希望するみなさんへのアドバイスをさせていただきます。重信さんのレポート4回目です。



アルバータ州 ムースに出会った内村勇貴さん

📍 ホストファミリーも試行錯誤 ― 食生活

ステイ先のファミリーの食生活、というのは留学生にはとても重要です。多民族・多文化であるカナダの家庭の食事は、野菜だけ食べるビーガン、逆に肉食中心など、ほんとうにさまざまです。異国に来て環境が違うなか、食生活は留学生の体調に影響することもあります。ホストファミリーも留学生の食事管理をする責任があり、試行錯誤をします。

あるファミリーは野菜をあまり食べない生活でしたが、そこに来た留学生は野菜不足で体調を崩しました。そこで留学生と話しあい、いっしょにスーパーに行くことにしました。その留学生は自分に必要だと思う野菜を選んで、その後体調はもどりました。コミュニケーションをしっかりと取り、バランスのいい食生活をめざすことがたいせつだとわかる例です。

📍 ホストファミリーも苦心 ― 信頼すること

ホストファミリーは「留学生になにかあったらいけない」と心配しますが、互いに信頼関係がまだ築けていない段階で留学生が外出するとき、「だれと、どこで会い、何時に帰宅するか」以外に、友だちの性格や趣味、学校の成績、親のことなどを根掘り葉掘り聞くことはひかえようと考えます。カナダでは高校生はおとなとして扱うのがふつうなので、「信用されてないんだ」と思われまいにしたいのです。

反対に留学生は「どこに、だれと、何時まで」はホストファミリーに最低限伝えなければいけません。コミュニケーションをはかろうとお互いに歩みよって信頼関係を築いていくことがたいせつなのです。

重信陽子（しげのぶ・ようこ）

大学時代にアメリカに留学。カナダで就職し、結婚、永住。2003年よりカナダでラボ高校留学を支援するラボ・カウンセラー。アメリカへの留学経験など、実体験にもとづいた親身なアドバイスは毎年多くの留学生を励ましています。



📍 ホストファミリーも異文化体験

ホストファミリーにとって日本からの留学生を受け入れるひとつの利点は「日本の文化を体験」することです。

また、留学生が留学生生活をするを見守りながら、学校、友だち関係、将来や、政治などさまざまなトピックでの意見交換もでき、価値観の違いを知る機会がもてます。多民族国家のカナダでも、留学生を受け入れることで異文化体験ができるのです。



ブリティッシュ・コロンビア州
大久保真季さんのクリスマス



📍 留学することを考えている人へのアドバイス

将来、留学を予定、希望しているみなさん、留学生生活をよりすばらしいものにするためのアドバイスです。

＊日本文化、政治、宗教、歴史、一般常識をあらためて見直して話せるようにしておくことをおすすめします。

＊自分の食生活を理解し、つねにバランスのとれた食生活を心がける―留学中はとくに新しい環境に対応するため、自分に必要なもの（水分補給、ビタミン剤などのサプリメント）を把握し、必要に応じてホストファミリーと善後策をいっしょに考える必要があります。

＊留学生活にストレスはつきものです（もちろんホストファミリーも）。ストレス発散できること……好きな音楽を聴く、運動する、読書するなどを見つけておいてください。

今回で最後になりますが、このラボ高校留学プログラムは高校生の成長過程に大きく影響を与えます。ぜひカナダに留学していただけるよう、カナダより心待ちにしています。

世界の国から

Vol. 13

アゼルバイジャン共和国の巻

ラボ日本語教育研修所 学生

AGHAYEVA ZULEYKHA (アガエワ ズレイハ)

※ズレイハさんは、2月末～3月はじめに全国で行なわれた「ラボ日本語教育研修所の学生とラボ会員とのオンライン国際交流」にも参加してくれました。



こんにちは!
Salam!

●あなたについて

1. 日本語を勉強しようと思った理由は？

ふたりのいとこが大学の日本語科を卒業後、日本へ留学しました。彼らから日本と日本語についていろいろと教えてもらい、興味をもったのが最初です。勉強を始めてみると日本語の語順がアゼルバイジャン語と同じで、同じグループの言語だということを知り、ますます興味をもつようになりました。

文化においてもアゼルバイジャンと日本は似たところがあると感じて、親近感をもちました。日本へ留学することは両親も認めてくれ、背中を押してくれました。

2. 休日はどんなことをして過ごしますか？

○あなたの国では

日本語の勉強をしたり、インターネットで日本について調べたりしていました。YouTube で新宿や原宿などの動画をみていました。

○日本では

数年前に日本へ来たときには、友だちがいろいろなところへ連れて行ってくれました。今回の来日でも楽しみにしていたのですが、新型コロナウイルスの影響でほぼ出かけられないのが残念です。



●あなたの国について

1. どんなことばを話していますか？

公用語はアゼルバイジャン語です。アゼルバイジャンは以前、ソビエト連邦（いまのロシア）を構成する国のひとつでしたので、この時代の名残りで、話しことばのなかにロシア語の単語が数多く残っています。しかし、ロシアから独立した現在、学校では作文に極力ロシア語をつかわないよう指導されます。ロシア語の単語がおもに話しことばだけに残っているのはこのような理由からです。よって、私たちの世代はロシア語がわかりませんが、親の世代はロシア語が話せます。

唯一の例外は、軍隊のことばです。軍隊用語はロシア語が、話しことばと書きことばの両方で数多くつかわれています。

2. おもな産業は？

石油産出国として有名です。石油が採れる（バクー油田）ことから、石油関連の産業がアゼルバイジャンの主要な産業になります。ガソリンの価格も日本と比べてとても安いです。自動車は高いのですが。

3. 気候は？

日本と緯度がほぼ同じなので、気候はよく似ています。四季があるところも日本と同じです。この点でも私たちににとって日本は、生活しやすい国です。

4. おすすめの観光スポットは？ 観光客に人気のある場所はどこですか？

首都のバクーでは、まずゴブスタンがおすすめです。ゴブスタンは表面に絵が描かれた岩（岩絵：ロックアート）がたくさんあることで有名です。これによって先史時代の人々の生活様式を知ることができます。狩りをする男性や踊る女性などを見ることができます。

そこから少し移動すると泥火山があります。これは、地下の泥が地下水、ガスといっしょに地表へ湧き出たものです。この泥は、身体によい効果があるとされています。2001年には泥火山のひとつが突然、炎を噴きあげ、ニュースになったことがありました。

バクー市内には、旧市街のまわりに壁が残っています。この壁と旧市街が、アゼルバイジャンの歴史を感じる場所として観光地となっています。

(注：バクーはかつて、二重の城壁に囲まれた城塞都市でした。現在は12世紀につくられた内壁だけが残し、その内側に広がる旧市街は「イチェリ・シェヘル(内城)」と呼ばれているそうです)

5. よく食べる食べ物？

お米の料理がとて有名です。ただ、日本と違うのは、お米を炊くのではなく炒めるところです。いわゆるピラフとして食べています。日本で食べられている食感のやわらかいお米は好まれません。パラパラとした食感が好まれるのです。

もうひとつは「ドルマ」という料理です。これは、挽肉や玉ねぎなどの具材をバターといっしょにブドウの葉で包んで煮込んだ料理です。

6. どんな家に住んでいますか？

日本に比べて広い家に住んでいます。とりわけ郊外の町や村では、とても大きい家に住んでいます。ひと部屋ひと部屋が大きく、部屋数も多いのがふつうです。土地も広く、どの家も広い庭をもっています。多くの家庭がその広い庭で野菜や果物を育てています。

7. 伝統的な衣装は？

伝統的な民族衣装には「ブタ」という飾りがかならずデザインされています。服のどこかに刺繍され



「ブタ」とよばれるシンボルマーク

ていたり、アクセサリになっていたりします。絨毯、お皿、カップなどのデザインにもなっていて、これでアゼルバイジャンのものだとすぐにわかります。



「ブタ」が入っている絨毯

8. 国民性をひとことでいうと？

お互いに助けあうところが特徴です。困っている人がいるとみんなが声をかけて手助けをします。面倒見がいいということなのだろうと思います。

9. 日本といちばん違うのはどんなところですか？

ゴミ箱の数です。アゼルバイジャンでは屋外に出るといたるところにゴミ箱が置いてあります。それが日本と大きく違うところですね。

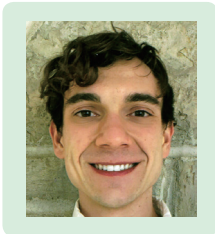
10. 日本と似ているのはどんなところですか？

年上の人を尊敬するところです。それ以外にもイスラム教でいわれていることと同じことが、日本でもたいせつにされているのを知ってびっくりしました。日本はイスラム教の国ではないのにあまりにも多くの考え方が共通しています。ほかの国ではそのように感じることがないので、アゼルバイジャンと日本は根本的な考え方が似ているのだと思います。

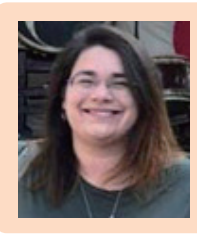
Hello!

ラボ・インターン

北米ラボ・インターンのふたりから、自分が中学生の頃に友達とよく話していた話題や、ペンパルプログラムでもつかえそうな英語表現を教えてくださいました。



George Arbanas



Lilli Hanik

4H とのペンパルプログラム 実施中

ラボ国際交流の受入れ団体のひとつである4Hが企画したペンパルプログラム



に、10～18歳のラボ会員約280名が参加。
プログラム期間は2月15日～5月17日です。

Q1 中学生時代によくつかっていたフレーズは？

- That's legit = "that's cool" (legit は legitimate の略)
- chill = "to hang out" "calm down" という意味です。"You wanna chill? (どっか行こうよ)" "Dude, chill out. (落ち着いて)" とつかいます。

中学生や高校生はよく友だちに"dude" "man" "bro" と呼びかけます。これは男性を意味する単語ですが、女性が同性の友だちを呼ぶときにもつかいます。

- Lit = "awesome" すごい、カッコイイ、最高という意味でつかいます。
- Slay = "to do something well or to be doing a great job" うまくいく、成功することをさします。
- Salty = "to be upset over something" むかついたり、イライラするという感情をあらわします。

Q2 中学生時代によく友達と話していた話題は？

When I was in middle school, I became interested in Japanese culture. A lot of my conversations with friends involved either anime or video games. I played games like Pokemon, Kingdom Hearts, World of Warcraft, and others, so we talked about those games, about cosplay, and about funny videos we found on the internet.

I really liked talking
about music and food with my friends.



Q3 SNS などによくつかう英語の短縮表記は？

ぼくのつかう表現はちょっと古いかもしれないけど……

- FYI = "for your information"
例) "fyi, I didn't do the homework so I can't help you."
- BTW = "by the way"
例) "btw, what are you up to next weekend?"
- IMO (IMHO) = "in my opinion" "in my humble opinion"
例) "Imho, LOONA is better than BTS."
- TTYL = "talk to you later"
- BRB = "be right back"

頭文字をとって、友だちのあいだだけで通じるオリジナルの表記をつくることもあります。

- LOL = "laugh out loud"
なにかものすごくおもしろいときにつかいます。
- YOLO = "you only live once"
だれかがなにかをするのに緊張していたり、心配しているときに勇気づけるためにつかいます。
- BRB = "be right back"
チャットなど会話の途中でいったん席をはなれることを伝えるときにつかいます。
- G2G = "got to go"
チャットなど会話を終わるときにつかいます。
- IDK = "I don't know."

Q4 絵文字の使い方は？

前は:) :(のように、日本とは違う絵文字を使っていたけれど、最近は日本文化に興味のある人が増えて日本と同じ^_^, ^^, TTのような絵文字を使うようになってきました。あと、便利なのでStickers (stamps) とか .gifs (moving pictures) も使うようになってきています。

アメリカではLINEがそれほど使われていないので、日本のようにイラストとセリフが組み合わされたようなスタンプを使うことはあまりありません。シンプルなアイコンを使うことが多いです。

世界で通用するコミュニケーション力

小島亜希子

幼稚園教諭



私はノルウェー人と結婚し、現在、ノルウェーの幼稚園で働いています。こちらで暮らすようになったきっかけはラボでした。なかでも中2のときのインディアナ州でのホームステイです。その鳥肌の立つような感動体験の数々、高揚した感覚はいまでも忘れられません。その体験で私は「大学で留学すること」「英語教師になること」を決意。英語教育が学べるノルウェーで1年留学をしました。

留学先ではノルウェー、フランス、ガーナなど、さまざまな国の人々と生活をしましたが、ラボの国際交流で海外の方と交流することに慣れていたおかげで、葛藤しながらも、「みんな違ってみんない



ホストファミリーとキャンプ（中2）

い」と異文化を受け入れ、臨機応変に自分を適応させ、自分の考えも伝えられるようになりました。

現在の職場であるノルウェーの幼稚園では、ほかの先生や子どもたちとノルウェー語で話します。移住して7年たっ

たいまでも理解できないことがあり、発音もまだまだ。それでも正社員にしてもらえたのは、国際交流体験やラボでしげんと鍛えられた「表現力」と「コミュニケーション力」のおかげだと思います。そしてほかにもラボで培った力が活かされています。ラボで何度も楽しんだ『三びきのやぎのらがらどん』『はらぺこあおむし』などの絵本、ソングカードの数々。なんとこれらはノルウェーでも共通です。『きょうはみんなでクマがりだ』などのもう音楽と動作が私の身体に染み

たちも物語を覚えてしまいます。そしていっしょにうたいたし、ノルウェーの自然の中でテーマ活動をするまでに（笑）。ことばが完璧でなくても人間同士、「伝えたいという思い」と「表現力」で何とか通じあえるんですね。

どんな会社に勤めても、だれと家族になっても、どこの世界に行っても、ラボで得た「コミュニケーション力」はとても重要です。それを鍛える体験をしげんと幼い頃からできるラボはすばらしいと思います。とくに、中学生という「子どものすなおな心をもちつつ、これから将来を切りひらいておとなになっていく」という貴重な時期に、国際交流でうんと刺激をもらう体験をさせてもらったことは、私にとって大きな財産です。

ラボや国際交流の体験がなかったら、私の人生はまったく別のものになっていました。ラボは私の人生に多くの可能性と道をひろげてくれました。

こじまあきこ＝ノルウェーの幼稚園
Tjordmarka barnehage
（福岡県・林 英子パーティOG）

Information

国際友好親善事業

■第34期高校留学生準備合宿

日程：5月3日(月)祝～5月5日(水)祝

会場：国立オリンピック記念青少年総合センター（渋谷区）

■海外派遣団全国引率者合同会議

日程：5月15日(土)～16日(日)

■海外からの青少年受入れプログラム

ラングブリッジ日本語研修生受入れ 11名

日程：7月10日(土)～8月1日(日)

北米青少年1か月交流受入れ 45名

日程：7月9日(金)～8月5日(土)

※人数はいずれも予定です

東京言語研究所

■春期特別講座（オンライン）※一部対面予定
理論言語学の主要な研究領域を2日間で広く学ぶことができます

日程：4月17日(土)、18日(日) 10:00～17:00

講師：窪田晴夫（国立国語研究所副所長、教授）他15名

■理論言語学講座ガイダンス（オンライン）

5月10日(日)から始まる講座の講師が各講座の紹介をします。理論言語学講座にご興味がある方はどなたでも参加できます

日程：4月24日(土) 10:00～

■理論言語学講座開始（オンライン）

言語学の広い領域について入門から上級まで18課目を開講予定です

※一部対面講義予定

日程：5月10日(日)～12月 19:00～20:40

前期・後期（各10回）

※その他、8月に夏期集中講義あり

■公開講座

ことばと関連した諸分野の第一線で活躍する講師による講座です

日程：6月5日(土) 14:00～17:00

講師：山極寿一（京都大学前総長）

※講義タイトル：未定

日程：7月4日(日)9:30～12:30（オンライン）

講師：下條信輔（カリフォルニア工科大学教授）「潜在認知の次元」その後（仮題）

ラボ日本語教育研修所

■外国人のための日本語教育

日程：4月5日(日)～6月18日(金)

受講者：モンゴル、ベトナム、韓国、中国、シリア、アゼルバイジャン、タジキスタン、ロシアからの留学生

■日本語教師スキルアップ講座

現職日本語教師のためのスキルアップを目指した実践講座です。

4月30日～6月4日（毎週金曜：6回）

ラボ日本語教育研修所（西新宿）

5月12日～6月2日（毎週水曜：4回）

オンラインで開催

■地域の多文化共生の推進

外国人と日本語で交流するときに必要となる「やさしい日本語」の入門講座です。

日本人のための「やさしい日本語」入門講座

日程：5～6月（詳細未定）

場所：オンラインで開催